

## こぼれ話 26

### 「赤い鳥」と巽聖歌

大正から昭和前期にかけて刊行された童話童謡雑誌「赤い鳥」は、作家鈴木三重吉が、長女すずに読ませる良質な児童向けの読み物がないことから発刊を思い立ちました。当時の第一線で活躍中の文学者たちが作品を寄せていて、三重吉の並々ならぬ意気込みを感じることが出来ます。大正七年（1918）七月の創刊号には、芥川龍之介が「蜘蛛の糸」を発表しています。

赤い鳥は、投稿欄が大変充実しており、童話部門は三重吉が、童謡部門は北原白秋が選者を担当しました。このため投稿欄からは、多くの童話・童謡作家がデビューしています。新美南吉の代表作「こんぎつね」も赤い鳥（昭和7年1月号）に掲載された作品です。

童謡「たきび」の作詩者巽聖歌も赤い鳥の常連投稿者の一人で、全部で二十三作品が掲載されています。大正十四年十月号に掲載された「水口」は、北原白秋から絶賛され、童謡作家として活躍するきっかけをつかみました。



▲「赤い鳥」大正14年10月号表紙